

「日産のコマーシャルを見て、買われたんでしょ」——男性は、5か月になる私の愛犬ロクシーをなでながら、にっこりと、しかし、大真面目でそう言いました。私はそのCMを知らないのですが、「日産の犬ですね!」とワイマラナー好きの人からよく声をかけられます。それにしても、冒頭のコメントはちょっと極端過ぎるのでは。新製品の缶コーヒーなら、ばかばかしいCMを見て買いに走るのわかります。でも、30kgにもなる犬をですよ……

小型犬ブームに火をつけた例のCMの二の舞になるとしたら……笑い事では済みません。消費者金融会社アイフルが流した一連のテレビ広告——ロングコート・チワワと無愛想な父親との関係を描いたCM——が大ブレイクしました。今、日本で人気のある犬といえば、ミニチュア・ダックスフンドに次いで、メキシコ原産のおかしな犬、チワワです。一般に今以上小さな愛玩犬が望まれているわけでもないのに、さらに小型化して高値で売ろうともくろむブリーダーが「日本特産の矮小犬」を必至で産み出そうとする構図が見えます。

この国では、野放図な裏業界とヤクザとの結びつきが犬繁殖の実態を支配し、百億ドル(約1兆2千億円)規模のペット産業の一端を支えています。昨年12月、ニューヨークタイムズ紙に掲載された記事によれば、手に負えない近親交配の結果、日本の犬に発生する遺伝性疾患例は米国に比べて4倍にも上るとのこと。中には、極端な小型種を得ようとするあまりに、1匹の健康な子犬と同時に、ひどい奇形のきょうだい犬が何匹も産み出され、廃棄されたり、実験用材料に売られるとか。時には、一見健康な犬が、後に、突如として奇妙な遺伝性疾患を発症させ、死に至るケースもあります。

問題は、小型の愛玩種だけにとどまりません。ロクシーを手に入れるに前に、私は、ワイマラナーについて広く調べました。東京のような狭い町で活動的な大型犬を飼うことに幾分不安を覚えたからです。しかし、自分のライフスタイルを考えた結果、公園にも仕事場にも近いなどの条件から、犬を十分に運動させ、世話できるとの確信を得ました。ただし、珍しい部類の犬を怪しげなペットショップや法外な値をふっかけるブリーダーを通さずに探そうとしたため、できれば避けたい方法をとる結果となりました。私はインターネットで犬を見つけたのです。

今思うとあやうい決定でしたが、日本で横行する悪質なブリーダーについて、当時、私はほとんど知りませんでした。子犬と飼育者の女性に会うとき、私は2種類の情報を用意して行きました——いかがわしいパピーミルのリスト、それに、健康上まったく問題ないことを確認するための数々の質問です。それが女性を怒らせたようですが、これだけは質問すべきだと確信していたので実行したまでです。そして、幸い、ロクシーは良心的な飼育者から入手することができました。それでも、インターネットで彼女を手に入れたことで、この手法に頼る悪質販売者を支持したことになるのでは——と後ろめたい思いが残ります。

(人間で言えば家系にあたる)ロクシーの血統は、ほぼ完全に日本産です。すでに1歳を過ぎた彼女は体重23kgで、ワイマラナーとしては小柄な方。体長は基準を下回っており、競技会に出場すれば自動的に失格になるほどです。もちろん、彼女をコンテストに出そうとも思わないし、私としても、完ぺきにはほど遠い血統について争う気持はないものの、この「規格はずれ」は、日本での大型犬繁殖の闇の部分のうちかわせるものです——例えば、日本式生活に合わせて小型化を図るような。

日本でのペットの地位は確実に向上しています。犬を飼っている者として気づくのは——動物飼育に対する関心が高まり、ペットにやさしいレストランや賃貸住宅の増加などです。ペットを大切なパートナー、また、家族の一員として扱っている責任ある、動物好きの人たちに私は毎日出会っています。

しかし、ペットの数が増加するにつれて、遺棄される犬猫の数も増えています——彼らを待ち構えているのは暗いニュースばかり。年間、約百万頭がガス殺されるか、または、動物実験のために命を奪われています。NPO法人の動物保護団体である「アニマルレフュージ関西」(アーク)は、捨て犬猫を救出して里親に譲渡する活動を長年続けています。新しいペットを求めている方は、まず、アークとか、同様の動物保護団体にあたってみるのが良いでしょう。

2003年の調査によると、日本のペット所有者の30%近くが飼っている犬猫をいやいや世話しているとか。つまり、愛されていないペットが数百万頭に上ること。確かに、犬を飼うと、時には不都合なことがあり

ます。時間的、金銭的余裕だけでなく、感情面の関与も求められるからです。しかし、子供の場合と同じでしょう——時として不便を感じるとしても、当然ながら、親であることのメリットがそれを補って余りあるものです。日本の犬をとりまく環境は、コンクリートの裏庭からルイヴィトンのバッグへと昇格したもの、この両極端が「ペットは物であり、人間の都合で好き勝手にできる」という誤った考えにつながるとも言えます。動物に対する非人道的扱いを防ぐ有効な法律がないことも、その一因でしょう。日本の人口は減少化をたどる一方、飼い犬の頭数は12歳以下の子供の数を上回っており、いまだにペットブームはおさまりそうもありません。第11回「人間と動物の関係についての国際会議」が10月に東京で開催されます。東京大会のテーマは「人間と動物：共生へのパートナーシップ」です。これを機に、日本のペット事情に良い変化が生まれることを期待したいものです。

*本稿は、Metropolis誌2007年3月23日号掲載の英文記事を翻訳したものです。
(www.metropolis.co.jp)

～本のご紹介～

「うでぐみシンカちゃん」 絵・文 アオソラルカ 680円(税込)

Miracle Forestのシンガーソングライター、アオソラルカさんから、素敵な絵本が届きました。野良犬だったシンカちゃんとの出会い、衝撃的な出来事を経て、無事ルカさんの愛犬となるまでを描いた絵本です。ペットブームの裏側、犬たちのもうひとつの現実を、シンカちゃんはちょっぴりせつなく教えてくれます。かわいいシンカちゃんのイラストで物語が展開して行くので、子供も大人も楽しめるプチ絵本になっています。

売り上げの一部をアークへご寄付下さるとのことですので、皆様のご協力をお願い致します!

ご購入は、www.miracleforest.comまで。

